プロジェクト“笑顔の花を咲かせよう！”

― 東日本大震災支援活動（1） ―

The Project “With a Wish for People to Smile Again！”

―Support Activities Affected by the Great East Japan Earthquake（1）―

菅瀬　君子　Kimiko Sugase
（愛知学泉短期大学生活デザイン総合学科）

木村　典子　Noriko Kimura
（愛知学泉短期大学生活デザイン総合学科）

抄　録

2011年3月11日、甚大な被害をもたらした東日本大震災。愛知学泉大学・愛知学泉短期大学は、学生が組織する学生会が中心となり募金活動を行い、翌年2012年から宮城県気仙沼市・石巻市、岩手県陸前高田市・大船渡市を中心に10年間東北被災地支援活動を行ってきた。今回の－東日本大震災支援活動（1）－本校では、2011年～2015年の5年間の活動記録の報告をする。学生らの現地での東北被災地支援活動の感想文のテキストマイニング分析を基に考察を行った。

その結果、被災地、被災者への「思い」、現地に行き被災状況を「見て」、「感じ」、被災者から話を「聞き」、それを仲間に「伝える」ことが支援につながり、自身の命を守るにはどう行動したら良いか、避難の重要性、防災の必要性、地域への貢献について理解を深めることができた。

キーワード

笑顔の花を咲かせよう（With a Wish for People to Smile Again）、東日本大震災（Great East Japan Earthquake）、支援活動（Support Activities Affected）、津波（tsunami）、奇跡の一本松（The Miracle Pine Tree）、応急仮設住宅（temporary house）、テキストマイニング分析(text mining analysis)

目　次

1　はじめに
2　活動の分析方法
3　活動記録
4　活動の分析結果と考察
5　おわりに

1　はじめに

東日本大震災は、2011年3月11日14時4分頃に発生、三陸沖の宮城県牡鹿半島の東南東130km付近、深さ約2kmを震源とする地震で、マグニチュード(M)は、9.0。最大震度7が観測され、死者15,467名、行方不明者7,482名、負傷者5,388名、震災から3ケ月後、首相官邸緊急災害対策本部が発表した[1)]。愛知県から700km離れている東北宮城県での地震であったが、筆者らが勤務している大学（愛知県岡崎市）の研究室においても比較的長い時間大きな揺れを体に感じた。地震の動画には、津波の濁流に家や車が飲み込まれ、大規模な火災の発生、住宅が倒壊

するなど壊滅状態の被害が映し出され唖然とした。

筆者（菅瀬）は、学生会（愛知学泉大学および愛知学泉短期大学の全学生が組織する）の顧問職に就いており、震災の翌日、学生会長から被災地への募金活動の相談を受け、本学学生と教職員に対し募金活動を始めることにした。この募金活動と学校法人安城学園の創立100周年を記念し「東日本から学ぶ」プロジェクトの立ち上げをきっかけに、2012年から2019年の８年間夏休みを利用し、被災地に出向き支援を行い、2020年はコロナ禍で被災地へは出向くことができなかったが、違う形での支援を行った。この「東日本から学ぶプロジェクト」は、本学園の教職員が2011年８月に現地を訪れ、全国から集まってきたボランティアの活動に感動し、個人として、学校として、地域として何ができるだろうかという報告を受けたこと、東海地震に備える必要があること、本学園が「私たちの仕事はまちづくり」のスローガンを掲げてきたことがきっかけとなった。単なるボランティア活動だけで終わるのではなく、「東日本から学ぶこと、学べること、学ばなければならないことがいっぱいある」というスタンスを基本にボランティア活動を行うこと、一過性に終わることなく５年間は継続的にかかわることを前提に「東日本から学ぶプロジェクト」というプロジェクトが、学校法人安城学園理事長、愛知学泉大学学長の寺部曉先生の発案で立ち上がった[2)]。

学生らとともに、菅瀬は８年間、木村は６年間現地に出向き活動を行った。

今回は、2011年から2015年の５年間の東日本大震災支援活動（以後、支援活動と略す）について、活動の取り組みと活動した被災地の写真を載せ記録の報告をする。そして、参加した学生らの活動後の感想文のテキストマイニング分析を基に考察を行い、大学生にしかできない支援の方法を模索し、今後の被災地復興のための支援活動を模索する。

2　活動の分析方法

2012年第２回支援活動と2014年第４回支援活後、学生の感想文をKH Coder を活用して、解析と客観化を試みた。2012年の対象学生６名、2014年の対象学生は14名である。

樋口を参考に、分析を進めた。テキストマイニング分析にはソフトKH Coder 3b03 g.exe を使用した。KH Coderは、立命館大学の樋口耕一先生により開発され、社会学の分野での利用が想定された内容分析およびテキストマイニング用のソフトウェアである。文書形式のデータに含まれる語を自動的に切り出し、多変量解析することによって全体を要約、提示し、全体傾向を把握することができる。

また、どのような語が抽出されているかを検索する機能、元のテキストデータ中で語が用いられているか文脈を確認するためのコンコーダンス機能が備わっており、文脈に立ち返り確認することができ、計量分析と原文解釈とを循環させる分析プロセスを実践できるソフトである 。

2.1　分析方法　段階１

自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を避けながら、データの様子を探る。

多く出現した語の確認、語と語の結びつき、テキストの部分ごとの特徴、内容が似た文書の群を探る。

KH Coderのコマンドの「抽出語リスト」「抽出語検索」「共起ネットワーク」を使用する。

多く出現していたコードの確認、コード間の結びつきの特徴を探る。

3　活動記録

今回、活動訪問した仮設住宅は、正式名称は応急仮設住宅である。文中では、仮設住宅の表記とする。仮設住宅は、災害救助法に基づき、被災者に対して供与するものであり、①新たに建設することによって提供される住宅（プレハブ）、②民間の賃貸住宅等の借上げによって被災者に提供する住宅（みなし仮設）の２種類が存在する。活動において訪問した仮設住宅は、すべて①の仮設住宅である[3)]。

活動訪問先の仮設住宅建設戸数は、気仙沼大島中学校仮設住宅：35戸、大船渡轆轤石仮設住宅：50戸、大船渡大立仮設住宅：65戸である[4)]。

3.1　第１回支援活動（2011年）
募金活動の開始

震災翌日（３月12日）から、学生会長と会役員らが中心となり、募金活動を始めた。募金は、全学生から一律ワンコイン（100円）、教職員からは、１口1,000円以上の寄付をお願いした。学生、教職員のみなさんから、心温まる支援をいただくことができた。また、大学内の購買に募金箱を設置させてもらい、地域の祭（地域貢献活動）に積極的に参加をし、ブース出店の際の売上金の一部を寄付した。募金活動は、翌年３月までの１年間行った。この募金活動

が、愛知学泉大学・愛知学泉短期大学学生会の、第1回東日本大震災復興支援活動である。

3.2　第2回支援活動（2012年）

日　　程	2012年8月23日～8月25日（2泊3日）
交通手段	名古屋－仙台（新幹線）
	仙台－陸前高田市・一ノ関市（レンタカー）
行　　程	8/23：①移動
	②本学女子バスケットボール部クリニック応援
	仙台市内高等学校
	③仙台市内荒浜地区被災地見学
	④仙台市内太白区大満寺にて被災者への祈り
	8/24：①陸前高田市市役所（プレハブ仮所）訪問　市長面談
	②「奇跡の一本松」高田松原被災地見学
	③「世界遺産平泉 復興支援「祈り鶴プロジェクト」
	④女子バスケットボール部クリニック応援
	一ノ関市内高等学校
	8/25：①本学女子バスケットボール部クリニック応援
	仙台市内中学校
	②移動

①岩手県陸前高田市「奇跡の一本松保存募金」

学生会では、募金活動で集めたお金を、どこへ、誰に、何に寄付をするか決めかねていた。直接、相手の方に渡したいという、役員全員一致した意見であった。震災の翌年2012年、学校法人安城学園では創立100周年を記念し「東日本から学ぶプロジェクト」を立ち上げた。その一環として、8月から9月にかけて安城市文化センターにおいてゲスト講師を招いた連続講演会を開催した。学生会役員6名と顧問、副顧問で、8月11日（土）の講演ゲストである、岩手県陸前高田市長の戸羽太氏の講演を聴講することにした。市長から、陸前高田市の津波の被害状況、「奇跡の一本松」を復興のシンボルとして残すことになった経緯、陸前高田市の将来、震災への対応についてなど聞くことができた。講演を聞き、市街地や海沿いの集落が壊滅状態になった陸前高田市の「奇跡の一本松」を残すための支援をすることを決めた。

次の案件として、「奇跡の一本松保存募金」へ送金して終わりにするか、直接、陸前高田市に足を運び市役所の関係者に渡すか、それとも、戸羽太市長に直接渡すことができるか、など意見を出し合い「戸羽市長に直接手渡す」ことを決めた。決めることは簡単だが、直接渡せる方法に苦戦を強いられた。そこで、系列高校の安城学園高校がすでに宮城県気仙沼市、岩手県陸前高田市、大船渡市へボランティア活動に行っていたため、安城学園高校の坂田成夫校長（当時）に、学生らの思いを伝え、ご尽力をいただき、直接市長に面会させていただくことになった。

当日、直接お会いし義援金を手渡すことができた。事前の申し合わせで、市長との面談時間は10分であったが、市長から津波がどのように市街を襲ったか、当時の様子や陸前高田市の復興について詳しく説明を受けた。特に若者のSNSでの支援に勇気づけられ繋がりができたこと、「仲間を大切にしてほしい、現地にきて被災の様子を見に来てアイスクリーム1個、ジュース1本でいいので買ってお金を落としてほしい、このことが東北への支援になる」と学生たちに支援の協力を仰いだ。10分の面談時間が30分に延長され、熱く語りかけてくれた戸羽市長の姿勢に、みなが心を打たれた（写真1）（写真2）。

写真1　陸前高田市　戸羽太市長から
陸前高田市の被害状況説明を受ける（2012.8/24）

写真2　陸前高田町の高台にあるプレハブの
仮設庁舎前。　（2012.8/24）

その後、市の関係者の方より、壊滅状態になった陸前高田市街地を案内され、多くの人が犠牲になった被災状況の説明を受けた。旧市役所庁舎（4階建の3階まで水没）（写真3）、旧庁舎1階は、津波で流された車、机、椅子が無残な姿で散乱していた（写真4）。市民会館（避難場所3階建水没）（写真5）。

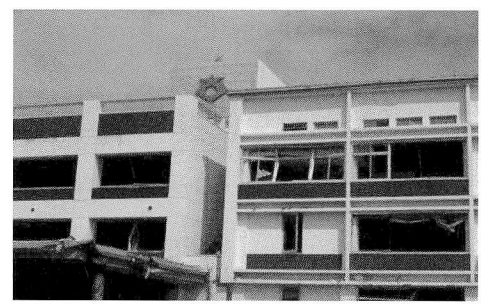


写真3　旧市役所庁舎　津波で全壊
4階建ての3階まで水没　（2012.8/24）

写真４　旧市役所庁舎１階玄関　津波で流されてきた車・机が散乱（2012.8/24）

写真５　市民会館　避難場所　３階建水没　（2012.8/24）

写真６　高田松原の海岸付近（2012.8/24）

約７万本の松が流され、唯一耐え残った「奇跡の一本松」のある高田松原の海岸付近。

（写真６）（写真７）、（写真８）

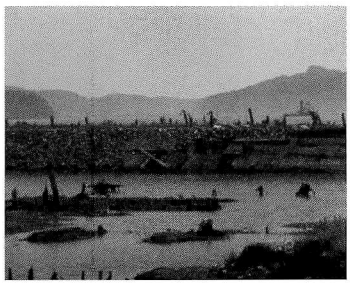


写真７・８　唯一耐え残った「奇跡の一本松」（2012.8/24）

現地を案内していただいた際、「津波は私たちの大切にしていたもの全てを飲み込み奪って行ってしまいました！」という言葉が今も心に深く突き刺さっている。何とも言いようのない悔しさをみなが感じた。

その時の学生と顧問との会話

学生：先生、写真に撮るのは辛いです。
　　本当に撮っていいんでしょうか・・・。

顧問：辛いけど、みんなに伝えるために来たんだから。心を鬼にしてがんばって撮ろう。

学生：無言のまま、手を震わせカメラのシャッターを切った。

震災が残した爪痕を目のあたりにし、言葉も失うほどの衝撃を受け、本当にこの様子を写真に撮っていいのだろうか？心が痛んだが、大学に戻りみんなにこの現状を伝えなければ被災地を支援出来ない。私たちはそのために代表として来たのだから。学生たちは、何度も自分に言い聞かせながら、時に涙ぐみカメラのシャッターを押した。

テレビのニュースで映し出される津波の被害を見て怖さを感じたが、目の前に積み重なる膨大な瓦礫の山のむごさは言葉では言い表せない。

②東北バスケットボールクリニック

学校法人安城学園創立100周年を記念「東日本から学ぶプロジェクト」の一環として、本学女子バスケットボール部による、宮城県仙台市、岩手県一関市の高校、仙台市内中学校選抜チームへのバスケットボールクリニックが企画された。そのお手伝いとして学生会が参加した（写真９）。

写真９　女子バスケット部によるクリニック　一ノ関市内の高校チーム　（2012.8/24）

③世界遺産平泉復興応援「祈り鶴プロジェクト」参加、仙台市太白区曹洞宗虚空蔵山大満寺参拝

世界遺産平泉 復興応援「祈り鶴（いのりづる）プロジェクト」は、オリジナル折り紙１枚につき50円以上の募金をし、復興への願いを込めて鶴を折り、震災で被災した子どもたちの生活を支援することを目的として岩手県が設置した、「いわての学び希望基金」に全額寄付される（写真10）。

中尊寺を参拝し、被災者へ祈りをささげ被災地の復興を願った。このプロジェクトは、2016年３月に終了した。

また、仙台市太白区の曹洞宗虚空蔵山大満寺を参拝し、被災者へ祈りをささげ被災地の復興を願った（写真11）。大満寺は、創建800余年、長い歴史を誇る由緒あるお寺である。このお寺は、本学家政学部１回生の方が嫁がれたお寺で、仙台に震災の支援活動に来ることを知り、後輩の学生達を歓迎してくれた。

写真 10
「祈り鶴（いのりづる）プロジェクト」(2012.8/24)

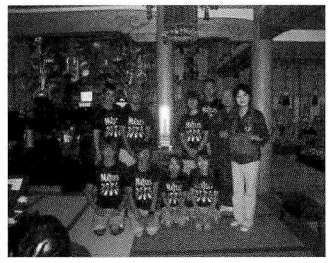


写真 11
大満寺を参拝、被災者の冥福を祈る　(2012.8/23)

3.3　第 3 回支援活動（2013 年）
活動テーマ“笑顔の花を咲かせよう！”
愛知学泉短期大学同窓会主催の
「東日本から学ぶ」研修会に参加

日　程	2013年8月18日～8月20日（2泊3日）
交通手段	名古屋－一ノ関間（新幹線） 一ノ関－現地（バス移動７時間）
行　程	8/18：①移動
	②世界遺産平泉中尊寺参拝、気仙沼市内（泊）
	8/19：①気仙沼市内の保育所、特別養護老人ホームで活動
	8/20：①気仙沼市・陸前高田市被災地視察
	②大船渡市市長表敬訪問
	③移動

同窓会主催の研修会には、本学短大生活デザイン総合学科に在籍する２年生、ファッションビジネスを専攻する長谷川ゼミ生、ビジネス情報を専攻する菅瀬ゼミ生、学生会役員、学生総勢 33 名、引率教職員４名が参加をした。今回、活動テーマ「笑顔の花を咲かせよう！」を決め活動を行った。この活動テーマは、第４回以降の活動の共通テーマとなり、笑顔の花を咲かせよう！プロジェクトとして引き継がれた。長谷川ゼミ生は、気仙沼市立松岩保育所の年長園児と１対１でキーホルダー作り、菅瀬ゼミ生は、気仙沼市立新月保育所の年長園児にランチョンマット作りを行った。園長先生から、園庭のすぐ下まで津波が押し寄せ、みんなで裏山に駆け登ったという話を聞いた。園児らとの会話の中で、学生たちに地震や津波の心配をしてくれた問いかけもあり、被災して怖い思いをしたにも関わらず温かい心つかいに胸が痛んだ学生もいた。特別養護老人ホーム恵潮苑での活動は、アロママッサージ（ハンドケア）とランチョンマット作りで交流をした（写真 12）。高齢者の方々は、来てくれてありがとう。と何度も頭を下げ、楽しかったと喜んでくれた。長谷川ゼミ、菅瀬ゼミの東北での詳しい活動内容は、愛知学泉大学・愛知学泉短期大学紀要第 49 号（2014）に報告されている。

写真 12　長谷川ゼミ・菅瀬ゼミによる特別養護老人ホーム恵潮苑での支援活動 (2013.8/19)

気仙沼市・陸前高田市被災地視察で、想像を絶する光景が目に飛び込んできた、気仙沼市鹿折（ししおり）地区に津波で陸地に打ち上げられた巨大な漁船（第 18 共徳丸）、全長約 60m、総トン数 330t の大型巻き網漁船。その周辺一帯は家の土台だけが残され草が生い茂った状態だった。震災から２年半経過したが手付かずの状態だった（写真 13）。

写真 13　津波で陸地に打ち上げられた巨大な漁船（第 18 共徳丸）
周辺一帯は家の土台だけ残った　(2013.8/19)

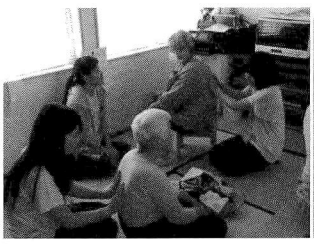
3.4　第 4 回支援活動（2014 年）
大船渡市仮設住宅住民、気仙沼市大島小学校児童・保育所園児と交流
大船渡津波伝承館語り部による被災体験談

日　程	2014年8月19日～8月22日（3泊4日）
交通手段	大学（岡崎市舳越町）－気仙沼市（バス移動14時間）
行　程	8/19：終日移動　大学－気仙沼までバス移動
	8/20午前：①大船渡市大立（おおだち）仮設住宅
	轆轤石（ろくろいし）仮設住宅
	炊き出し、タクティールケア、工作で交流
	午後：②大船渡津波伝承館語り部による津波映像の解説と
	被災体験談「あなたに助かってほしいから」
	防災教育（防災・減災）、質疑応答
	8/21午前：①気仙沼市立大島小学校　児童・園児とゲーム、
	工作で交流
	②大島地区被災地見学
	※大島へは気仙沼港フェリー乗船：気仙沼～浦の浜（写真14）
	午後：②気仙沼市内被災地見学
	③陸前高田市内被災地「奇跡の一本松」他を見学
	8/22：終日移動　気仙沼市内ホテル～大学までバス移動13時間

写真 14　気仙沼から
フェリーで大島浦の浜へ
（2014.8/21）

写真 15　大島小学校
児童・保育所園児と
ゲームで交流（2014.8/21）

学生会役員、サークル部員、本学短大生活デザイン総合学科に在籍する２年生、医療・福祉を専攻する木村ゼミ生、ビジネス情報を専攻する菅瀬ゼミ生、学生総勢 33 名と教職員５名が参加をした。安城学園と関わりの深い気仙沼市立大島小学校の児童、大島地区保育所の園児らと、工作やゲームで交流をもった（写真 15）。大船渡では仮設住宅で暮らす高齢者らとタクティールケア（写真 16）、夏野菜カレーの炊き出し（写真 17・18）で交流を持った。炊き出しは大量調理になるため、参加者全員で炊き出しの事前研修を大学で実施した。ご飯を炊く班は炊き出し用アルファ化米を使用、カレーを調理する班は野菜の下ごしらえ、カレールーと水の分量の調整など、役割分担と完成時間を確認し本番に備えた。出来上がったカレーライスを試食し、味・硬さなどを評価した。事前準備をしたことで、当日はアルファ化米ご飯、カレールーの硬さは程良く時間通りに調理することができ、仮設住宅の住民の方たちに大好評であった。カレーの具材に使用したミニトマトは、本学短大幼児教育学科の学生たちが育てたものをいただき持参した。また、木村ゼミ生は、木村先生の家で収穫された甘夏ミカンでジャムを作り、ひとくち食パンに塗りおやつとして仮設住宅に暮らす人たちに配った（写真 19）。これも大好評であった。



左写真 16　ろくろ石仮設住宅（タクティールケア）
右写真 17　大立仮設住宅（炊き出し準備）（2014.8/19）

後日、大船渡仮設住宅のめんこいサロンの高齢者から、手作りのかわいい手拭きタオルがお礼の品として、学生と教職員らに届けられた。

左写真 18　大立仮設住宅（炊き出　カレーライス）
右写真 19　大立仮設住宅（おやつを配る）（2014.8/19）

震災から３年半経ったが、復興が進んでいる地域とそうでない地域との差がみられ、復興にはまだ時間がかかる状況だった。陸前高田市の被災地では、2014 年３月末から、街を再建するためのかさ上げ工事が始まり、高台をつくりに必要な大量の土砂を運ぶため、奇跡の一本松が見渡せる場所に、総延長約 3km の巨大コンベヤーが建設されていた。道路と並行するように頭上に巨大な道路が走っているようで、宇宙都市をイメージするかのような別世界の空間だった（写真 20・21）。

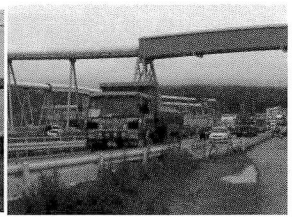
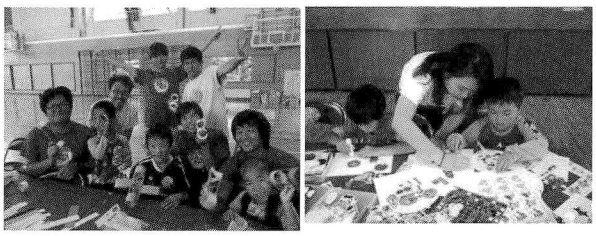


写真 20・21　陸前高田市市街地かさ上げ（高台）工事
総延長約 3km の巨大コンベヤーで土砂を運搬
まるで宇宙都市のようだ　（2014.8/21）

3.5　第５回支援活動（2015 年）
気仙沼市大島小学校児童・保育所園児・大島中学校仮設住宅住民と交流
南三陸鉄道南リアス線「震災学習列車」

日　程	2015年8月24日～8月27日（3泊4日）
交通手段	名古屋－一ノ関（新幹線）、一ノ関－現地（バス移動1時間）
行　程	8/24:終日移動
	8/25午前：①気仙沼市立大島小学校児童・保育所園児と、
	ゲームや工作で交流
	※大島へは気仙沼港フェリー乗船：気仙沼～浦の浜
	午後：②気仙沼市立大島中学校仮設住宅（校庭）住民と交流
	8/26午前：大船渡津波伝承館にて、語り部による津波映像の解説
	被災体験談「あなたに助かってほしいから」防災教育
	午後：③震災学習列車にて、南三陸鉄道南リアス線
	「盛駅～釜石」区間乗車（現地ボランティアガイド）
	④気仙沼市・陸前高田市被災地「奇跡の一本松」見学
	8/27：終日移動

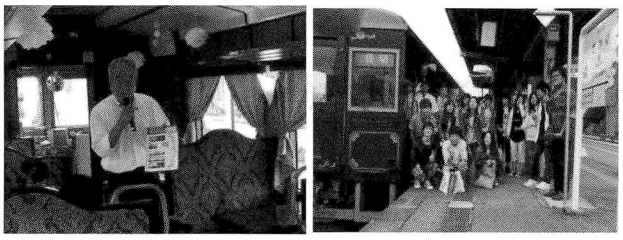
学生会役員、サークル部員、短期大学生活デザイン総合学科2年生、学生総勢14名と教職員4名が参加をした。前年に引き続き、気仙沼市立大島小学校で児童と園児に、ゲーム（さかなつり）、工作（ストロー飛行機、うちわ、缶バッチ、手提げ袋デコバージュ、木ホルダー）で交流をした（写真22・23）。大島中学校仮設住宅で暮らす91歳、88歳の高齢者らと手遊び歌、ゲーム（さかなつり）、工作（うちわ）、手芸（手提げ袋デコバージュ）をし、岡崎から持参した銘菓を食しながら、津波の怖さ、高台にすぐ逃げ命を守る、仮設住宅での暮らしなどの話をしてくれた。手作りの蕗のアンゼリカを用意して歓迎してくれた。遠いところから仮設住宅を訪ねてくれたことを大変喜んでくれた（写真24・25）。運動場に建設された仮設住宅は、2018年8月に撤去され、校庭が使用可能になった。



左写真22　大島小学校児童らと（ストロー飛行機）
右写真23　大島小学校児童らと（かわいいうちわ）
（2015.8/25）

左写真24・右写真25
気仙沼市立大島中学校仮設住宅居住者らと交流
手遊び歌・うちわつくり　（2015.8/25）

今回、新しい試みとして、盛駅から釜石駅までの区間、「震災学習列車」に乗車し、現地のボランティアガイドさんに震災の状況など説明を受けた（写真26）。今回、予約した際に乗車する車両は、三陸鉄道のシンボルカラーである、青（三陸の海）・赤（鉄道に対する情熱）・白（誠実）を表している車両であったが、2014年に旧南リアス線用としてクウェートからの支援を受けた紫色を基調に塗装された内装がレトロ調の豪華な新型車両（写真27）に乗車することができた。被災状況が見える場所で、一旦停止や徐行運転をしてもらいながら、被災地の今の状況について列車で移動しながら、直接、今の復興状況を「見て・聞いて・感じる」ことができた。震災から4年半経っていたが、ところどころに被災した爪跡が残り、被害の大きさを目のあたりにした。現在も震災学習列車は運航されている。三陸鉄道（北・南リアス線）は、被災地の復興シンボルとして2015年4月6日全線開通した。



盛駅から釜石まで「震災学習列車」に乗車
左写真26　現地のボランティアガイドさんの説明
右写真27　レトロ調の豪華な震災学習列車（2015.8/26）

大船渡津波伝承館での、語り部による津波映像の解説と被災体験談は、齊藤賢治館長が語り部として解説してくれた。齊藤館長は、震災発生時に従業員に避難を呼びかけ高台へ逃げ助かり、叔母を亡くし探し続けたという辛い被災経験を持っている。自身が撮影した地震発生の瞬間から津波到達するまでの映像には、「津波、来る。避難して！」と社員への呼びかけや、「あーあ！」という悲壮な館長の声が収まっている。また、自身で撮影した津波前後の写真を使い、当時の様子をわかりやすく説明しながら学生への問いかけをし、生き残るための避難のあり方、命を守るにはどう行動したら良いか、避難の重要性、防災の必要性について学ぶことができる体験であった。「時間がないときは、何も持たずに早く行動し欲を無くしなさい！」、この命を守るメッセージは、胸に突き刺さった。「自分の判断で、すぐに動くことが出来るか」、「すぐに逃げよう」という判断を個人々が下すことが大切という言葉が強く印象に残った（写真28）（写真29）。

大船渡津波伝承館にて防災学習　（2015.8/26）
左写真28　齋藤賢治館長による被災体験談
右写真29　避難の時必要なもの
時間が無いときは何も持たずに早く逃げろ

奇跡の一本松近くのガソリンスタンドのポールの先には、「津波水位 15.1M」の印表示がされている。ポールの下に近づき上を見上げると、津波に飲み込まれそうな錯覚に陥る（写真 30）。

写真 30　陸前高田市
津波水位（2015.8/26）

4　活動の分析結果と考察

4.1 段階1 頻出語

2012年、2014年の支援活動における頻出語リストを表１、表２に表した。今回、「動詞・形容動詞」について抽出した。2012年は89語、2014年は200語（表には92語表示）であった。頻出の多い語には、「思う」、「見る」、「行く」があがった。このデータを基に上位10位の語について、その出現率（語全体に対して）の一覧を表３に示した。

表１　2012年活動　頻出語リスト（動詞・形容動詞）

NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数
1	思う	17	24	伝わる	2	47	建ち並ぶ	1	70	聴く	1
2	見る	14	25	悩む	2	48	建つ	1	71	逃げる	1
3	行く	10	26	聞ける	2	49	見える	1	72	得る	1
4	考える	9	27	亡くなる	2	50	見渡す	1	73	入り込む	1
5	出来る	8	28	来る	2	51	枯れる	1	74	避ける	1
6	感じる	5	29	流す	2	52	向かう	1	75	飛び込む	1
7	伝える	5	30	貴重	2	53	広がる	1	76	変わる	1
8	聞く	5	31	元気	2	54	止まる	1	77	忘れる	1
9	知る	4	32	移す	1	55	受ける	1	78	忘れ去る	1
10	大切	4	33	移せる	1	56	収める	1	79	与える	1
11	残る	3	34	違う	1	57	住む	1	80	立つ	1
12	分かる	3	35	過ぎる	1	58	出る	1	81	ぐちゃぐちゃ	1
13	話す	3	36	過ごす	1	59	出会える	1	82	ポジティブ	1
14	大変	3	37	壊す	1	60	助ける	1	83	安全	1
15	驚く	2	38	学ぶ	1	61	植える	1	84	前向き	1
16	経つ	2	39	活かす	1	62	進む	1	85	悲惨	1
17	言う	2	40	頑張る	1	63	数える	1	86	必要	1
18	撮る	2	41	願う	1	64	生きる	1	87	不安	1
19	残す	2	42	起きる	1	65	積み上げる	1	88	不幸	1
20	使う	2	43	起こる	1	66	折れる	1	89	無駄	1
21	失う	2	44	教える	1	67	設ける	1			
22	終わる	2	45	響く	1	68	続く	1			
23	違う	2	46	繋がる	1	69	探す	1			

表2　2014年活動　頻出語リスト（動詞・形容動詞）

NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数
1	思う	75	24	楽しむ	6	47	接す	3	70	悩む	2
2	行く	34	25	大切	5	48	生きる	3	71	喋る	2
3	見る	30	26	受ける	5	49	触れ合う	3	72	選ぶ	2
4	来る	20	27	驚く	5	50	乗る	3	73	振る	2
5	聞く	19	28	違う	5	51	助け合う	3	74	信じる	2
6	元気	18	29	話しかける	4	52	持つ	3	75	乗り越える	2
7	感じる	17	30	遊ぶ	4	53	思える	3	76	傷つける	2
8	知る	13	31	亡くなる	4	54	向かう	3	77	書く	2
9	作る	12	32	逃げる	4	55	見える	3	78	出来る	2
10	考える	11	33	当たり前	4	56	貴重	3	79	出る	2
11	流す	10	34	大変	4	57	喜ぶ	3	80	集まれる	2
12	言う	10	35	大丈夫	4	58	過ごす	3	81	集まる	2
13	起きる	10	36	絶える	4	59	リアル	3	82	失う	2
14	学ぶ	9	37	好き	4	60	流れる	2	83	自然	2
15	不安	8	38	見せる	4	61	立ち上がる	2	84	合わせる	2
16	進む	8	39	関わる	4	62	離れる	2	85	幸せ	2
17	行う	8	40	訪れる	3	63	暮らす	2	86	建てる	2
18	話す	7	41	抱える	3	64	変わる	2	87	経つ	2
19	食べる	7	42	必要	3	65	聞こえる	2	88	教える	2
20	忘れる	6	43	入る	3	66	聞ける	2	89	起こる	2
21	住む	6	44	伝える	3	67	分かる	2	90	頑張る	2
22	残る	6	45	貼る	3	68	悲惨	2	91	覚える	2
23	帰る	6	46	送る	3	69	迫る	2	92	いろいろ	2

表３　上位10位の語に対する出現率

	2012年（n=89）		2014年（n=200）	
順位	抽出語	出現率	抽出語	出現率
1	思う	19	思う	38
2	見る	16	行く	17
3	行く	11	見る	15
4	考える	10	来る	10
5	出来る	9	聞く	10
6	感じる	6	元気	9
7	伝える	6	感じる	9
8	聞く	6	知る	7
9	知る	4	作る	6
10	大切	4	考える	6

出現率をみると、2012 年の１位は「思う」19%、2014 年の１位も「思う」38%であった。

両年とも、２位、３位の順位の違いはあるが、「見る」、「行く」があがっていた。

特に、2014 年活動の「思う」の出現率は高かった。

4.2 段階１ 共起ネット

出現率の高い語について、他の語との関わり、コード間の結びつき、特徴を探ってみた。それを見たものが、図１、図２である。2012 年活動の共起ネットでは、図１に示した７つのサブグラフに分かれた。７つのサブグラフを黒の点線でくくりグループ化をした。特に、①・③・④のサブグラフの黒の点線で囲まれた中の語を見ると、①は、女子バスケットボールクリニックのお手伝いをした時、移動する車の中から見た、被害にあった建物が印象に残ったと思われる。それを他者に「伝えたい」という思いが伺えた。③は、陸前高田市の関係者の方から、壊滅状態になった陸前高田市街地を案内され説明を受けたことで、現状を理解した。現地で「見て」、「知る」こと、被災地のために何か「出来ないか」考えたものと伺える。④は、戸羽市長との面談で、震災遺構として残すべきか、市長自身の葛藤や復興をどう進めていくかなど熱心に自分たちのために時間を延長して話をしてくれたこと、東北に来てジュース１本、アイスクリーム１つ買って東北にお金を落としてほしい、それが東北への支援になると教えてくれたことなど、学生たち自身が「思う」ことが多くあったことが伺えた。想像を絶する光景に驚いた。

2014 年活動の共起ネットでは、図２に示した８つのサブグラフに分かれた。８つのサブグラフを黒の点線でくくりグループ化した。特に、①・②・③のサブグラフの黒の点線で囲まれた中の語を見ると、①は、津波、伝承、映像、家、流す、怖いなど小さな語がいくつも現れていた。「恐ろしい」という語か

ら、津波伝承館で見た津波の映像に映し出された、家や車が津波に飲み込まれていく様子、助けを求めている人、齋藤館長の話を聞き、計り知れないことの重大さに気づかされたと推察する。②は、気仙沼大島小学校で児童や近隣の保育所の園児らと、工作を通して交流した「楽しい」思い出。③は、大船渡市の仮設住宅の住民らにカレーライスの炊き出しをして、一緒に食べ話をして交流したこと。

その他、⑥は、今回の活動で多くの光景を見て、強く印象に残り、多くのことを「思った」。

陸前高田市市長をはじめ、仮設住宅で暮らす方、ボランティアの方との話、④は、現地に来て「聞く」ことができた。「見て・聞いて・感じて・思った」ことが、サブグラフから伺い知れた。

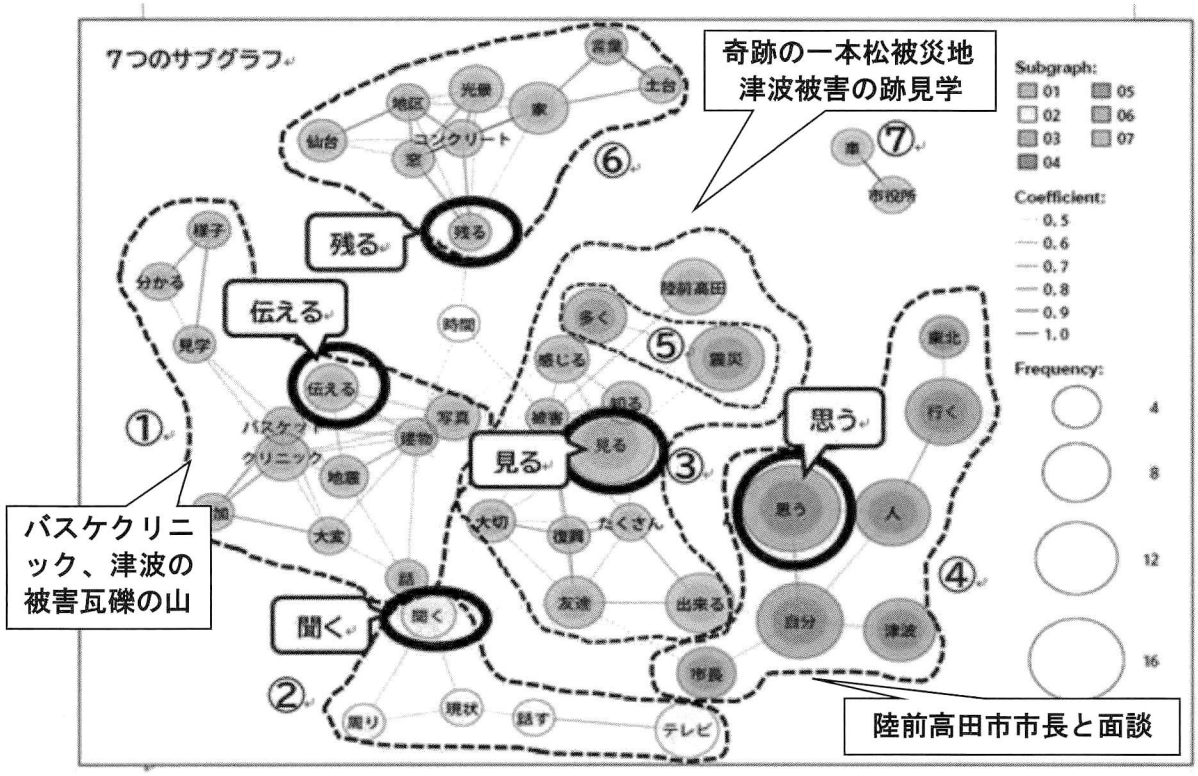


図1　2012年活動　語の共起ネット　関連語検索

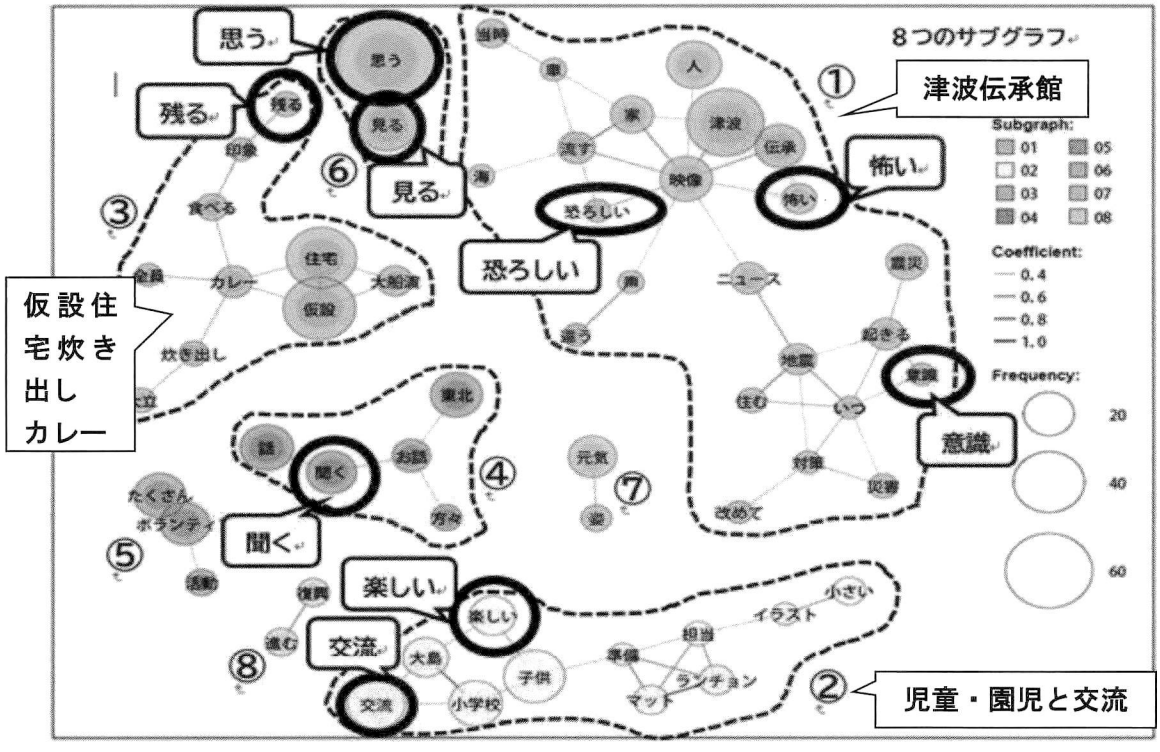


図2　2014年活動　語の共起ネット　関連語検索

頻出語の出現率で、2012年、2014年の両年とも、「思う」の出現率が最も高かった。共起ネットワーク上の「思う」について、学生たちの感想文のセンテンス「思う」の内容を確認してみた。

2012年の活動での「思う」は、「今後も被災地を支援し続けていくことを、後輩たちに伝えていきたいと　思い　ました」。「市長から現状や今後どうしていくのかなどを聞き、僕たちに何かできることはないかと　思い　ました」。私が見て感じたことを自分の言葉で、一人でも多くの人に伝えたいと　思い　ました」。「この状況を写真に収めることも大切なことだと　思い　ました」。「今回限りではなく、自分ができる事を探して行動に移せたらいいと　思い　ました。一日も早く復興することを願っています」。

2014年の活動での「思う」は、「今もまだ傷は癒えていないのかもしれないと　思い　ました」。「東北に行く前はどんな話をすれば良いかのか不安に　思っ　ていました」。「募金をしていれば被災地や被災された人たちのためになっていると　思っ　ていました」。

この2つの活動で「思う」の内容を見ると、支援活動に行く場所、支援する内容、相手によって「思う」の内容に違いがでることが分かった。

今後、「思う」以外の出現率の多い頻出語についての分析も検討している。

5　おわりに

東日本大震災から、10年が経った。10年前を振り返れば、「先生、募金活動しよう！」のアクションから、本学の「東日本大震災支援活動」が動き出した。

今回は、2011年から2015年の5年間の活動の取り組みと活動した被災地の写真を載せ記録を残すことが重要と考えまとめた。そして、参加した学生らの活動後の貴重な感想文のテキストマイニング分析を行い、大学生にしかできない支援の方法を模索した。学生にしかできない支援は、大学で学んでいるスキルを活かした被災地で生活している生活弱者に寄り添う交流であると考える。テキストマイニング分析から、活動を通して学生たちが「被災地の方を気遣い、思いやり、活動する中で自身と向き合い、生き方について考える機会」が持てたとことが伺えた。自身の命を守るにはどう行動したら良いか、避難の重要性、防災の必要性、地域への貢献について理解を深めることができた。学生のみならず、ともに活動した教職員にとっても「人生の学びの場」であった。2016年から2020年の5年間の活動記録は、今後予定される、愛知学泉大学紀要第4巻第2号に執筆を予定している。

謝辞

5年間の現地での活動において、常にサポートをしていただいた、気仙沼市の菊田榮四郎氏、大船渡市民ボランティアの水野卓一氏、津波伝承館齊藤賢治氏、安城学園高等学校前校長の坂田成夫先生、大島小学校児童館のみなさま、先生方、大船渡仮設住宅、大島中学校仮設住宅のみなさま、気仙沼市内の保育所、特別養護老人ホームのみなさま、気仙沼ホテル観洋のみなさまに、こころより感謝申し上げます。

引用文献

1) 内閣府　防災情報ページ　特集　東日本大震災
http://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h23/63/special_01.html（2021.9.1　アクセス）
2) 学校法人安城学園105周年記念誌　東日本から学ぶプロジェクト　4　2017.11.22
3) 仮設住宅
https://www2.rikkyo.ac.jp/web/taki/contents/2014/20140428.pdf（2021.9.1アクセス）
4) 仮設住宅建設戸数（気仙沼市）
https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s019/010/010/020/028/280511/12600511iinkai4-2.pdf
（2021.9.1　アクセス）
5) 仮設住宅の状況一覧（大船渡市）
https://www.city.ofunato.iwate.jp/uploaded/attachment/8204.pdf
（2021.9.1　アクセス）

参考文献

1) 樋口紘一，社会調査のための計量テキスト分析，ナカニシヤ出版，2014.
2) 長谷川えり子，菅瀬君子，瀧本幸子，高柳友美：被災地支援活動を通して育成された社会人基礎力（1），愛知学泉大学・短期大学紀要第49号，2014
3) 菅瀬君子，長谷川えり子，瀧本幸子，高柳友美：被災地支援活動を通して育成された社会人基礎力（2），愛知学泉大学・短期大学紀要第49号，2014
4) 大竹美登利，坂田隆：東日本大震災，ボランティアによる支援と仮設住宅　－家政学が見守る石巻の2年半－　建帛社（2014）
5) 樋口耕一，中村康則，周景龍：KH Coderを用いた計量テキスト分析実践セミナー　初級編　株式会社SCREENアドバンストシステムソリューションズ（2020）

（原稿受理年月日：2021年9月13日）